
星の花

木花咲夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星の花

【Nコード】

N7626A

【作者名】

木花咲夜

【あらすじ】

失った哀しみを胸に抱きながらも、生きていこうとする『彼』。それを見守ろうと決意した、『彼女』。どうか生きていて、それが願い。昭和初期を背景にした、短編恋愛小説。

瑞花は、閉じていた目を静かに開ける。

そこに映ったのは、十六夜。

そして、銀の月光に照らされて、悪戯な春風に舞い上がる桃色の花弁だった。

そこで、桜の洪水が起こっていた。

春風が吹き続けて、桜の花弁を散らし、舞い上げている。その中を、裸足で静かに歩いていった。

黒と白の花輪が、沢山横一列に並んでいる桜並木の中を。

愛しい人を思い出しながら、彼女は歩いていった。

(行かなくちゃ……)

彼女は、考えていた。

……彼のために、私は何が出来るだろうか……？

私は、蒼そうのモノ。

身体も、心も、成長していたその時間までも。永遠に、それは変わらない。

そう、二人は誓い合ったのだから。でも。

彼は、もう彼女だけのモノではない。

その身体も、心も、成長していくこれからの時間も、彼自身のだって分かっている。

もう自分一人だけの人ではないって、分かっている。

それでも、彼女は考えるのだ。

『ねえ、蒼。私、貴方に何がしてあげられる?』

だが、瑞花の問い掛けに、蒼は返事をしない。

『私、貴方の隣に居るのよ! 蒼っ!?』

そこで気付く。

もう彼には私の姿は見えないのだ、と。

こんなにも近くに居るのに。

そう。瑞花は、彼の手に自分の手を重ね合わせているのだというのに。

+++

「それでは……。私は、これで」

背後から蒼に声をかける人物、それは遠子とこだ。

それに反応して振り返った蒼の瞳や表情は、あまりの哀しみに絶望感に包まれていた。それを見た遠子は、ほんの少し前の自分の姿を思い重ねてしまっていた。

「……………ああ。瑞花に逢いに来てくれて、有難うございました。遠子ちゃん」

「いいえ。あの、蒼さん」

「何?」

「私に何か出来ることって、ありますか? 明日からのご飯とか、掃除とか」

「いや、大丈夫だよ。誰かに家政婦さんを紹介して貰って、雇って、してもらえばいいんだから」

「でも……」

遠子は心配でならなかった。こんな弱りきった蒼の姿を見た事がなかったから。

「しばらくの間、俺を放つといてくれないかな。自分の事は自分で出来るから、さ」

「……蒼さんがそう望むのであれば……」

それだけを言い残し、遠子はそっと玄関へ行き、出て行った。

春風は冷たかった。

寒さを感じ、自分の両腕で自分の身体を遠子は抱き締める。

「ね、お父さま……」

亡き人へ、遠子は語りかける。

「こういうときは、お父さまが羽織とか私にかけてくれましたよね」

夜空を見上げる遠子の頬には、一筋の涙が下へと伝い落ちていく。

最愛の者を失った悲しみは、とても分かる。だが、それは理解できるといっただけの話だ。立ち直るのか、思い出に浸ったままこれらの日々を過ごしていくのかは、彼自身が決めていくことだ。静かに見ていくしか出来ないことを、遠子は理解していた。

自分もまた、最愛の者との思い出の中で過ごすことしか、出てこないのだから……。

玄関の戸が静かに閉まった音だけが響き、そして部屋は静寂が支配する世界となった。そんな中で瑞花に聞こえたのは、蒼の嗚咽だった。冷たく硬直し始めた瑞花の遺体の頬を擦りながら、語りかける。

「発作の苦しみから楽になれたね、瑞花」

嗚咽は酷くなるばかりで、蒼は瑞花の身体に覆い被さるように抱き締めながら、語り続ける。

「どうしたらいいんだろうな？ 瑞花を喪った『その後』なんて、俺さ、考えてなかったんだよ」

そのとき。

彼のために出来る事が見つかった。瑞花は決心していた。

『蒼と会話することが出来なくても。蒼の隣にいて、見守っている。だって、このままでは……。貴方が“この世からいなくなっ”てしまふもの』

蒼の背後からそっと抱き締め、その決意を告げていた。

その後。

蒼は、一体の人形を作り上げる。

その人形の姿は、最愛の者に生き写しだった。その人形の名は、りんか燐花という。

彼は、どんな想いを込めてその名を付けたのだろうか……？

+++

それは、もう半年前の出来事になるか。

「瑞花はそれから蒼が作り上げた人形『燐花』の中に心を宿して、ただ静かに蒼を見守り続けている。

「おはよう」と蒼に朝の挨拶を交わし、黙々と人形制作をしている彼の姿を日中ずっと見守り、「おやすみ」と夜の挨拶を呟き、彼の眠る姿を見守る。

彼女は気になっていた、蒼が自分の夢を見ていてくれるかどうかを。

共有するのは、思い出しなくなってしまう。共に共感したり、共に励まし合うことはもう出来ない。

それを覚悟して、こうして隣にいる。

けれども。

彼が自分に話し掛けてくることはない、人形の『私』を見ることもない。

(どうしてなのかな?)

本当に寒くて一人ぼっち……、気の所為だろうか？

どれだけの時間の中で、この痛みを我慢すればいいのだろうか？

そう何度自問して、何度同じ答えを言い聞かせてきたのか。

蒼の心の中の涙が、埃となって、前向きに生きて行けるようになるまでに決まっているのではないか。あのとき、それを覚悟の上でしたのではないか。

（貴方が希望という光に向かって歩いていったら、それが蒼と私の……）

幸せだと。そう思った。それが望みだと、祈った。

ただ、蒼に気付いて欲しかったのかもしれない。瑞花も泣いているのだということに。

『ねえ、私が泣いているのが聞こえる？』

貴方にもう一度逢えるのなら、私の全てを捧げるから。だから、もう一度貴方の温もりを感じたい。だけど、もうそれも叶わない永遠の願いだっ分かっている。

だから、自分の心は泣いてしまっているのか……。

開いていた目を静かに閉じる。脳裏に映ったのは、銀色の夜露に舞い上がる桃色の花弁だった。

自分が彼の傍から離れてしまった日。桜の洪水が起こっていた。春風が吹き続けて、桜の花弁を散らし、舞い上がっていた。その中を、自分は歩いていた。

黒と白の花輪が、沢山横一列に並んでいる桜並木の中を。

（行かなくちゃ……）

あのとき、思っていた。

……彼のために、私は何が出来るだろうか……？

私は、蒼のモノ。

身体も、心も、成長していたその時間までも。永遠に、それは変わらない。

そう、二人は誓い合ったのだから。でも。

彼は、もう彼女だけのモノではない。

その身体も、心も、成長していくこれからの時間も、彼自身のだって分かっている。

もう自分一人だけの人ではないって、分かっている。

それでも、彼女は考えるのだ。

約束した。誓い合った、愛する人に。

違う時間を生きていると彼が気付いて、自身の物語の始まりがあることを気付くことを信じて。

自分という存在が、『思い出』というカタチになることを願って。

今日も、彼女は見守る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7626a/>

星の花

2010年10月8日15時37分発行